

乳幼児期の母子関係からみたこころの病の成り立ち

小林隆児

関係に着目するようになったのはなぜか

これまで私は乳幼児から大人まで幅広く多くの患者さんと接してきましたが、その中でもいつも痛感してきたのは、乳幼児期のそだちの大切さでした。しかし、残念ながら実際の乳幼児期に子どもたちがどのようなそだちを体験しているのか、本当のところはまだ分かっていないというのが現実だろうと思います。私たち臨床家がよく知っているのは、過去に体験した若者や大人たちによって語られる乳幼児期です。それは過去を振り返るなかで語られる体験ですがありません。それはそれでとても重要な心的事実ではあるのですが、私は乳幼児期に子どもたちは養育者との関係のなかでどのような体験をしているのか、その現実そのものを知りたいと思ったのです。しっかりと自分の目で確かめ、そこで得たものを多くの人たちと共有し、それをもとに今日の前の患者さんの理解に役立てることによってよりよい

臨床を実践していきたくて考えてきました。

そのような思いを抱きながら二〇年前に九州から関東に移り、東海大学の新しい学部で母子ユニット(MIU)を開設し、そこで乳幼児期に実際子どもは母親とのあいだでどのような体験をしているのかをこの目で確かめたいと考え、以来一四年間にわたって母子臨床の実践を積み重ねてきました。そこで得たデータは膨大な量にのぼり、その知見の全貌を纏めることは大変な作業でした。東京での生活ではなかなかそれを遂行することができなかったのですが、三年ほど前に古巣の九州福岡の地に戻る機会を得たことから、こころのゆとりを取り戻し、今年(二〇一四年)二月にやっと纏めることができました。それが小書『関係』からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』(ミネルヴァ書房)です。これは主に一歳台から二歳台までの生後三年間を中心にして五歳台まで五五例について、その母子関係の

様相について観察したデータをもとにまとめたものです。

今日はそこでまとめた知見の中からその要点をまとめてお伝えし、それを踏まえてこころの病の成り立ちをどのように考えたらよいかをお話し、皆さんのご意見をいただきたいと思えます。

母子関係の観察をどのように行なったか

乳幼児期早期の大半は、ことばのない世界で関係が展開している時期です。特に、関係がうまくいかない、ことばが出ないなどの心配で相談に来られる事例では、大半の子どもたちはことばでのコミュニケーションはとれません。したがって、ことばのない世界での母子関係を問題として取り上げることになります。私はその中で実際どのようなことが起こっているのか、その実態を直接観察することは勿論のこと、ビデオ録画を行い、あとから振り返って検討するという作業を丁寧に積み重ねてきました。

直接観察することは勿論大切ですが、MIUではビデオ録画装置も備えていましたので、これが非常に威力を発揮しました。なぜなら、ことばのない世界での関係を把握するためには、単に直接観察するだけではちょっとした動きを見逃してしまうことが少なくありません。しかし、私は録画ビデオを振り返りながら検討することによって、実に多くの発見をしたのです。今回一冊の書に纏める際に、久しぶりに改めてビデオをみてみると、驚きの連続でした。ただし、そうした発見を得るため、

各事例のビデオを少なくとも数十回は繰り返して見たものです。驚いたのは、何度見ても新たな発見をするほどで、知的興奮の連続でした。これまで私は何をみていたのだろうと反省するとしきりでした。

そこで皆さんには実際に録画されたビデオをお見せするのが理解して頂く上で一番の近道なのですが、なにぶんこの講座は一般公開の形式を踏んでいますので、この場でそのようなビデオをお見せすることはできません。そこでなんとかことばにしてその実態に限りなく近いかたちでお伝えしようと考えてきました。

MIUで母子関係の中身が実際にどのようなものかを観察するために、私が用いたのは新奇場面法という心理学的実験の枠組みです。図1にお示ししています。

図1(次ページ参照)

「行動」ではなく「情動(甘え)」に着目すること

本来この枠組みは皆さんよくご存知のアタッチメント研究で用いられているものです。およそ一歳から二歳までの実験的に母子分離を行なうことで子どもに不安を惹起させ、その不安を母親との再会によってどのようにおさめようとするのか、そこで観察されたアタッチメント行動の特徴を検討するというものです。

「アタッチメント attachment」ということばに似みじくも示

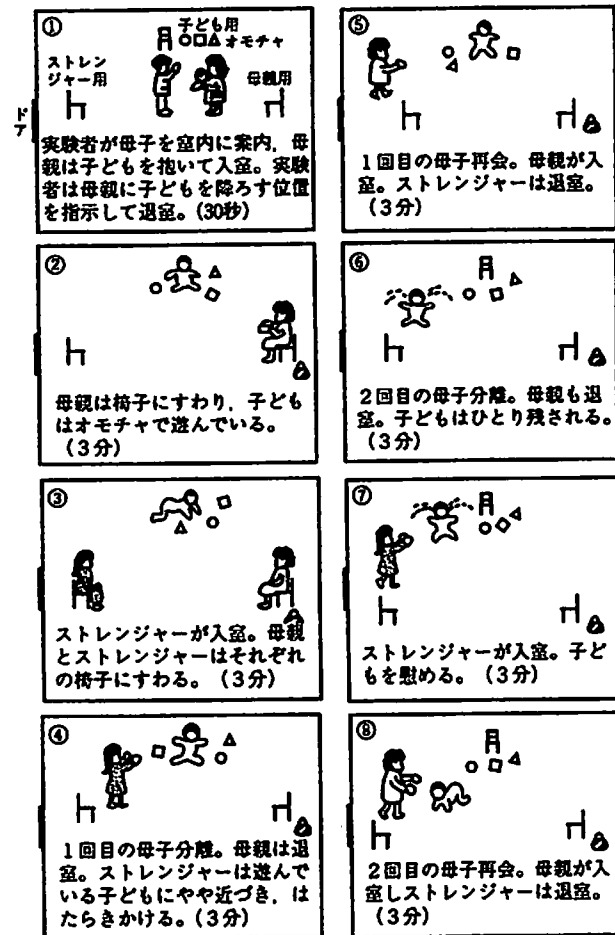


図. 新奇場面法 (SSP) の手順
(出所: 築多道『愛着の発達』大日本図書, 1987年, p. 79)

されているように、新奇場面法は「くっつく attach」という行動に焦点を当てた実験観察の枠組みです。私も当初そのような視点から観察を試みたのですが、私には子どもの母親に対して示す行動の背後にどのような気持ちがあるのか、そのことをとても実感をもって感じ取ることができませんでした。子どものアタッチメント行動のみに焦点を当てて観察することなど、極めて不自然な態度でもともとやっておれなくなり、素朴にそこで感じられる自分自身のこころの動きに沿って母子交流を観察することにしました。すると、子どもの行動の大半が母親に向ける「甘え」をめぐるこころの動きを示していることを確認するようになったのです。

今からMIUで得られた知見の数々を紹介しますが、最後にぜひとも取り上げたいのは、乳幼児期の直接観察から得られたものが、思春期・成人期に至った患者さんたちとの治療面接において、どのようなかたちで再現されているのかをお示しすることによって、乳幼児期の体験の重要性について改めて考え直してみたいと思います。

一歳台にみられる母子関係の様相

新奇場面法は〇歳台の赤ちゃんを除き、主に一歳台の子どもを主な対象として実施するものです。精神科の臨床の場でこの時期の子どもに直接治療的に関与する機会はそれほどありません。多くの臨床家はほとんどその実態を知らないのではないのでしょうか。幸い私はMIUを開設していましたので、いろいろ

などこころから紹介されて一歳台のお子さんたちにも出会うことができました。それでも本研究で取り上げた事例はわずか八例です。

対象となった事例はすべて、母親になつかない、甘えない、関係がしっくりこないなど、深刻な内容での相談でお会いした母親とその子どもたちです。ほとんどの事例が他の臨床の場では自閉症スペクトラム障害 (ASD) や発達障害と診断されると思います。しかし、私はそのような診断の枠組みを用いず、その関係を見ることにしています。

事例を母子関係の枠組みで観察してみると、単に「なつかない」「甘えない」などといえるようなものではないことがわかってきました。子どもたちは実にデリケートな反応を示しています。それは次のような特徴として描き出すことができます。一つには、この時期の子どもたちは母親に対して向ける様々な感情の動きを目に見えるかたちでもとも分かちやすくと比較しにくれることです。このことは二歳台以降の子どもたちと比較した時、決定的な違いがあります。二歳以後は自分の感情、思いを極力母親に見せないように振る舞うようになってくるからです。

ついで分かったのは、母子関係をむずかしくしている関わりの特徴は次のようなものです。「母親が直接関わろうとすると子どもは回避的になるが、いざ母親がいなくなると心細い反応を示す。しかし、母親と再会する段になると再び回避的反応を示す。」つまり、母親が目の前にいると「甘えない」と思われてい

る子どもでも、目の前から母親が消えてしまうと、明らかに細かい反応を示して泣いたり、探し求めたりするようになるのです。あまりに激しく泣くために、三分の時間を待たなくてはすぐにストレンジャーや母親に入ってもらうこともしばしばですが、ストレンジャーや母親が目の前に現われると途端に、それまでの姿が嘘のように、何事もなかったようにして母親を積極的に求めることをしなくなります。

母親から見た子どもと母子関係からみた子ども

この知見は私たちにとても大切なことを教えてくれます。母親は自分の目の前の子どもを愛しか見ることができません。そのため母親を避けるばかりの子どもを見ていると、自分を嫌っているのだ、相手をしてほしくないのだとつい思ってしまう。しかし、いざ母親がいなくなると、子どもによってはいさぐくに、あるいはしばらくしてから耐えられなくなつて明らかに細かい反応を見せて母親を求めるようになります。このことから子どもたちは本当のところは母親を強く求める気持ちを持っているのだということがわかります。しかし、母親は子どものそうした姿を見ることはほとんどありません。だから母親の目に映る子どもの姿は自分を避け、嫌っているのではとの思いを抱くのも仕方ないところかもしれません。

ただ、ここで非常に大切な変化が次の段階で起こっているのです。ビデオをお見せすればよくお分かりいただけるのですが、事例によっていろいろですが、かいつまんで説明しますと、母自閉症というと、対人回避的傾向が強固され、そのような対人関係の問題を持つものと思われてきましたが、そんなに単純にいない関係の取り方であることがわかったのです。

甘えのアンビヴァレンス

私はこの母子分離と再会場面で子どもが母親に見せる態度の背後に動いている心の動きのゲンユタルトを「甘えたくても甘えられない」「心理として描き出すことができると考えたのです。つまり、子どもは母親に対して単に「甘えない」のではなく、「甘えたい」気持ちを抱いているにもかかわらず、いざ母親を前にするとまるで「甘えたくない」かのような態度を取ることがわかったのです。ある対象に向けるこのような二通りの動きは精神医学で「アンビヴァレンス」と言われるものですが、私はこの「アンビヴァレンス」が実際に母子関係の中で具体的にどのようなかたちで表出されるのかを実証的に示したということができます。

ここで私が発見した子どものアンビヴァレンスという心理特性は、非常に複雑な心理を示すものです。甘えたいという気持ちは働いているにもかかわらず、いざその場になると甘えたくないかのような振る舞いをする。けつして甘えたくないわけではないにもかかわらず、甘えたくないかのような態度を取るところに大きな特徴を見るのです。そこにアンビヴァレンスを捉える必要があるわけです。

一歳台の子どもがそのような反応を示していることを私たち

親が部屋のドアを開けて入ってきます。そして子どもを見つけて近づいていきます。すると、そこで驚くべきことが起こります。母親が目の前まで近づくと、それまで入室して来た母親をじっと見つめていたにもかかわらず、すっと視線をそらして、まるで母親を求めていないかのような態度を取ってしまいます。あるいは近づいて来た母親に抱かれはしますが、すぐに全身をのけぞらせて降りようとします。

このように子どもは母親の不在によって心細くなり、母親を求める気持ちがとても高まったにもかかわらず、いざ母親が戻って来て相手をしてくれそうになると、まるで何事もなかったかのような態度を取って、回避的になっていくのです。したがって母親にすればやはり自分を求めていないと思わせるをえなのです。

さらに細かく見ていくと、この母子分離と再会の流れの中で、子どもは非常にデリケートな反応を見せています。なんとか我慢しようとしたり、自分の気持ちを悟られまいとするかのようにしてさり気なく母親にサインめいた仕草をしたり、抱かれたような抱かれたくないようななんともいえない微妙な姿勢を取ったりしています。これらの多くはビデオ観察で初めて捉えることができるほどの些細な変化です。子どものことで心配が強い母親にとってこのような仕草や変化は容易に気づくことのできないのも当然です。

このような変化、反応が起こっていることを私はMIUでのビデオ観察によって初めて知ることができたのです。これまでは知る必要があります。私はそのことを知ることによって、子どもの見方に劇的な変化が起こったのを実感します。自分ひとりで苦境に置かれていながら、誰にも救いを求めることができないことを意味するわけですから、彼らが経験している心細さは並大抵のものではないことが想像できましょう。

アンビヴァレンスによる子どもの反応の多くは

誰にでも理解できる

私は西南学院大学の学部一年生、二年生に必ずつぎのような質問をして考えてもらいます。

「あなたが一、二歳の子どものように、母親に対して「甘えたくても甘えられない」状態におかれたら、どのような気持ちになつてどのように振る舞うようになると思いますか。可能な限り考えて答えて下さい。」

私の勤めている西南学院大学の学生さんは育ちの良さを感じさせる人たちが多く、とても素直で言われたことにはすぐに応じる人が多いですね。あまり反抗期も経験してこなかったのではないかと思われる学生さんも少なくありません。いわゆる「いい子」で育ってきた子どもたちだということができると思いますが、多少リップサービスが入っていますが(笑)。

すると学生さんは多くのことを答えてくれます。とてもよい回答をしてくれます。一例を示します。

「私は母親に対して何かを悪いことをしたのではないかと思つて、母親の言うことを聞くように努めると思っています。」

これなどはとても西南学院大学の学生さんらしい回答だなと思つて感心しました。その他にも「あまり母親に近づかず、ひとりで遊ぶ」、「わざと母親を困らせるようなことをやって注意を自分に向けさせる」、「わざと無視するような態度をとる」、「わざと怪我をする」など、いろいろありました。

私はこのような学生の回答とMIUの新奇場面法で観察した二歳台の子どもたちが見せる反応があまりにも酷似していたことに大きな驚きを感じるともなるほどどうかといたく納得したことを覚えていきます。

MIUで観察した子どもたちは一歳台に母親とのあいだで「甘えたくても甘えられない」関係にあつていつまでたつても安心することができず、常に強い不安と緊張に晒されています。そのため、二歳台になると、次第にそうした不安や緊張を軽くしたり、紛らわしたりするために、いろいろと反応を示すようになりませんが、その内容の大半は、先ほどの学生さんが回答を寄せてくれた内容そのままだったのです。

このことは、ある意味では当然だといつていいでしょう。MIUで出会った子どもたちも私たちと同じ人間ですから、同じような反応を見せるのは当然だといえます。ただ強調しておきたいのは、MIUの子どもたちではとても不安と緊張を体験していますので、その試みは彼らにとつてみれば必死の思いでの振る舞いといつていいでしょう。

私は二歳台の一六例において、彼らがどのようなにして不安に対処しているかを具体的かつ詳細に検討しました。その具体的なことによつて気を紛らわし、不安と緊張を多少なりとも和らげようとするための行動です。これまで「繰り返し行動」、「常同反復行動」として捉えられてきたものです。

このことを明確にしめてくれた男児がいます。なぜか母親は椅子に座つたままじつとしていて、子どもに働きかけることがありません。そのように指示されたのではないかと思われるほどです。子どもは緊張のあまり、少し離れた所に座つて遊んでいます。子どもは熱中して遊んでいる状態ではないことが感じ取れます。しかし、母親が退室してストレンジャーと二人きりになつてストレンジャーがさり気なく子どもの遊びに付き合つと、子どもは遠慮がちにストレンジャーの働きかけに応じるようになりしました。しかし、ストレンジャーと母親が入れ替わると、すぐさま先ほどと同じように一人で遊び始めました。その後、母親が退室してひとりになると、戸惑いを見せ始め、ボードになぐり書きを始めました。いつまでもそれを繰り返していました。しかし、ストレンジャーが入室して相手を始めると、再び先ほどの同じように遊びを始めたのです。楽しそうに声まで出すようになりしました。その後母親と入れ替わると、さり気なくまたもやひとりでもボードになぐり書きを再開したのです。

私はこの男児の反応を見て、彼の強い不安と緊張を感じるとともに、それを少しでも紛らわせようとするようにしてなぐり書きを繰り返すようになった反応を見て、なるほどそんなのかととても納得したので今でも生々しく思い出すことができます。

な内容は以下ようになります。

二歳台にみられる母子関係の様相

—— アンビヴァレンスによる不安と緊張への対処法

① 対人回避的な対処行動

第一に、相手から距離をとつて直接的な関わりを回避する行動があります。しかし、彼らは母親の存在が気になり、何かに集中することはできません。そのため母親の存在を気にしながら何かとサインめいた行動を取りますが、一定の距離をとつてそれ以上には近づこうとしません。そのような子どもは行動は、私たちは「気移りが激しい」、「多動」、あるいは「落ち着きの無い」状態として映るものです。

このような子どもたちはけつして興味をもつたものに目をやつて母親を誘うようなことをしているのではありません。たまたま目に入った物を手当たり次第に手に取つては母親に声掛けをして母親の関心を引こうとする。母親がそのの応じようとするのですぐさま他の物に関心が移る。このような傾向が見られます。母子関係の中で見ていると、子どもは母親の関心を引きたくてそうしていることがとてもよく分かります。おそらく母親から見ると、気移りが激しく落ち着きがない子どもに映っているのかもしれませんが、実際はそうではないのです。「関係」という視点から見ると初めて気づいた重要な知見です。

第二に、母親に対して直接的な関与を回避し、自分ひとりで対処しようとする行動です。それは何かひとつのことに集中する新奇場面法という枠組みを用いたことによつて初めて気づくことができた変化です。MIUの実践で得た非常に大きな収穫でした。

第三に、自分の周りの環境を極力変化の無い状態に保とうとする対処行動があります。不安が強く安心が得られない状態に置かれると、周囲の知覚刺激が子どもたちにとって不快で不安を駆り立てるような色彩を帯びたものになります。そのため、子どもたちは周囲の世界を極力変化のない状態に保とうとする。われわれには些細と思われるような変化が子どもたちには強い不安を引き起こすからです。「同一性保持 sameness」などと言われ、自閉症に特徴的なものとされてきたものです。

第四に、常に他者との関わりを回避していくならば、他者に依存することはできず、結果的に「過度に自立的に振る舞う」ようになります。自分で思うようにならない時でも他者の力を借りることなく、あくまでひとりでやろうとします。対人回避的で自閉的的印象づけられる行動を取るがゆえの必然的な結果です。

MIUである子どもが遊び道具をうまく扱えず、戸惑つていたのでありますが、母親が目の前にいるにもかかわらず、母親に助けを求めたことをしません。一人で黙々と扱っているのですが、うまくやれません。いらいらしているのが手に取るようにわかります。そうかと思うと、彼がストレンジャーと一緒に遊び始めると、壁際に積まれていた高いブロックに一人で登ろうとします。危ないのでストレンジャーが近寄つて手を差し伸べて支

えてやると、子どもはそれを知ってわざとらしく倒れるようにしてストレンジャーに助けてもらっているのです。それは明らかにストレンジャーに甘えている姿です。その後母親とふたりで遊ぶ場面になると、突然ブロックを投げつけていらいらを示しています。一連の流れの中で子どもの反応を理解すると、母親の前では思いうように甘えられないゆえのいらいらであることがわかりますが、母親にしてみれば、自分のいないところでストレンジャーに甘えているのですから、わかりようありません。母親の困惑が手に取るようにわかります。

こうしてみると、彼らはひとりりで好きこのんでそのように振る舞っているのではないことがよくわかります。

以上の内容を改めて眺めてみると、これらの対処行動の大半はASDの診断において中核的な症状として取り上げられているものであることに気づかれます。「自閉的な対人行動」、「常同反復的行動」、「強迫的こだわり」などがそれに該当します。

これまで精神科臨床の場で多くの精神科医がこれらの行動を認めると、ほとんどの場合、発達障害ないしASDと診断してきました。そしてこれらの行動特徴は一次的障害として捉えられ、脳障害との関連が強いものとして理解されていますが、今回の研究によれば、母子関係において生まれた「アンビヴァレンス」すなわち「甘えたくても甘えられない」ことによって必然的に生まれた反応行動だということがわかります。「甘え」に焦点を当てることによってこれらの行動はすべて一元的に理解

できるようになります。

②相手との関係を求めるための対処行動

つきに取り上げるのは、子どもの方から直接的に母親に何らかの関わりを志向しながら対処しようとする試みです。先の対処行動を内面的反応とするならば、このような対処行動は外向的反応だということが出来ます。この種の対処行動は母子関係をより一層複雑なものにしていきます。なぜならそれによって母親にもより屈折した反応を誘発することになりやすからです。それは以下のような形を示します。

なんとか母親の関心を自分に引き寄せようとして、相手の嫌がることをやろうとします。「甘えたくても甘えられない」子どもにとつてある意味では自然な反応だということも出来ますが、それはこれまで「挑発行動」といわれてきたものに該当します。

しかし、このような対処行動があまり功を奏することはありません。相手の嫌がることをやれば、相手の関心を引き出すことには成功しても、叱咤されることによって結果的には突き放されることとなります。すると子どもは再び心細さから不安に襲われます。それがさらなる相手の関心を引き出すための「挑発行動」を誘発します。このようにして母子関係の悪循環は進展していくことになるのです。思春期以降に頻発する行動障害の多くはこのような関係の悪循環によってもたらされたものです。将来的に悲惨な結果を生む対処行動だということが出来ます。

ついで取り上げたいのは、先の「挑発行動」が直接相手に向けられた行動であるのに比して、相手の関心を自分に引き寄せようとする点では同じ目的を持ちますが、行動としては直接自分に向けられたものがあります。それがわざとらしく壁に頭を打ち付けるなどの注意喚起行動としての「自己刺戟行動」です。

「自己刺戟行動」も先の「挑発行動」と同様、功を奏することはありません。時には、相手から同情の念を示されることはあっても「甘え」そのものが享受されることは期待できません。相手からは制止され、禁止されることとなります。すると子どもは当初の意図が達成されず、突き放されることになって心細さは強まっていきます。その結果「自己刺戟行動」はより一層激しいものになっていきます。「自傷」と称されてきたものは注意喚起行動としての「自己刺戟行動」が発展したものと捉えることができるのではないのでしょうか。このような「自己刺戟行動」は情動負荷を軽減する働きをも担っていることから習慣化しやすいということがいえます。

③相手の顔色をつかがう行動から進展した対処行動

「甘えたくても甘えられない」子どもたちは、いつまでたっても「甘え」を断念することができず、常に母親の顔色を伺うようになります。そのような状態にあって、子どもたちはなんとか母親との関係を維持しようとして試みる対処行動は、その深刻さの度合いからいくつかに分類できます。

第一に、「甘えたくても甘えられない」子どもがなおも母親と

の繋がりを求めようとする際に、最も穏便な解決方法は、相手の意向に沿って行動することです。相手の怒りを引き起すこととなく、相手も喜んで受け入れてくれるからです。その典型的な対処行動が「いい子になる」ことです。相手の期待に沿うことによって自分の存在を認めてもらおうとする試みです。西南学院大学の学生さんがすぐに思いつくのも当然の反応です。

第二に、先の相手の意向に従うことと近い反応ですが、相手の意向が読みにくい場合、子どもはたじろぎ、どう対処すれば良いか困惑が強くなります。そこで相手の意向を常にかがいがいながら、相手に気に入られようと懸命に振る舞うようになります。「相手に取り入る」、「媚（こ）びる」などと表現できるような言動です。このような対処行動はわれわれには演技的色彩を帯びて映りやすいのですが、子どもなりの母親との関係を維持しようとする懸命なものがきとして捉えることができます。それでも「甘え」が得られない時には、母親が見ている前でストレンジャーである他人に甘えてみせ、母親に「当てつける」、「見せつける」ようになることがあります。

第三に、「いい子になる」ことが、自分なりの能動的な対処行動であるとするならば、次に問題となるのは、自分の欲求や意思を全面的に押し殺し、相手の思いに「過度に従順に振る舞う」ことです。その結果相手の思いに翻弄されることとなります。母親の価値観に引きずられるようにして母親の誇りに乗せられていけば、このような結果を生む危険性が高まることは当然予想できます。それほど子どもは無力な存在だということですが。

このような対処行動がいかに痛々しいものかは誰でも想像できましようが、私たちが特に問題としなければならぬのは、それが後々精神病を思わせるほどの深刻な自我障害をもたらすからです。

このような子どもたちは自分の欲求をすべて抑えることになりませんから、近い将来大変な状態になることは容易に想像できます。ある子どもは数年後に幼稚園で他の子どもたちに突然噛み付くという事で大きな問題となりました。

私は西南学院大学に移ってから学生相談にも従事するようになりました。その中で印象的な男子学生の事例をいま思い出しましたので、お話しします。四年生ですが、あまり単位がとれないので留年が避けられず、困っての相談でした。話を訊いてみると、朝起きて大学に行こうと思うが行けない。歯磨きをしてはいますが、いまやめて家を出れば一時間の講義に間に合うことはわかっている。しかし、そう思うと途端に歯磨きをより丁寧に行こうとする自分がいるというのです。だからいつまでたっても大学に行けない。どうしたらよいかわからないというものでした。いわゆる強迫といわれる症状であるということがわかりました。そこで私はこれまでの彼の生活を聞いていきました。特に母親が強い存在で今でもいろいろと下宿先に訪れて来ては生活の様子訊ねてみたり、四年間で卒業できなければあととは自分で学費をアルバイトで稼いで大学に通うようにと注文つけたりしているそうです。自分を強く出せない気の弱そうな学生でしたので、私は彼に「日頃お母さんからどんなことを言われる

ことが多いの。印象に残っているせりふはどんなことですか。」と訊ねました。すると、彼はあまり考えることもなく素直に「あんなもやればできるのにね」と答えたのです。私は彼のこのことばを聞いてすぐにMIUのある事例を思い出しました。

それは二歳九カ月の男児とその母親で、母親の思いに翻弄されていた事例です。SSPでふたり遊んでいる場面でした。子どもは母親に何もいえずうつぶいまま母親の声掛けにだけ応えるようにして遊んでいました。そばに滑り台があつたのを見て母親は唐突に子どもに滑り台を滑ったらと誘いました。子どもは波々滑り台に行つて滑つたのですが、床にマットが敷かれていました。それを見た母親はすぐさま滑り台を滑り終わつた子どもに、「ころんは？」と前転するように誘つたのです（というよりも命令に近いものでした）。すると、しばし子どもは戸惑つていたのですが、二度も言われたのでしぶしぶ前転を始めました。やる気がないのでうまくできません。斜めに転がつてしまいました。それを見た母親は思わず「だめね！」と駄目出しをしていました。このときの子どもは気持ちと今お話をした学生さんの気持ちが重なつてしまい、つい思い出したのです。私はこの話をこの学生さんに話して聞かせました。すると学生さんは黙つて聞いていたのですが、涙を流してしばらくじつとしていました。この学生さんは母親の期待に応えようとして頑張つて来た典型的な子どもだと思えますが、彼の悲しみ、やるせなさ、が伝わってきます。でもなぜか彼には母親に対する怒り、反抗心などはまったくといっていいほど感じられません。それ

がより一層彼の悲しみを強めているようにも思います。このような親子関係は最近とても多くなっていると思います。学生相談では同じような親子を想像させるものが多いことを実感しています。彼らの少なからずは精神科医療機関で発達障害などと診断されることが多いのですが、今述べたように彼らはみな乳

幼児期にこのような難しい親子関係を体験してきたのです。以上述べた内容は学生さんでも想像できるものです。このような対処法は確かに問題となりますが、彼らなりの懸命の努力によるもので、彼らのこころの安定に役立っている側面があることを私たちは忘れてはいけません。

しかし、臨床で出会う子どもたちの深刻さには私たちの想像を超えたものがあることもわかりました。それを最後に述べます。

④明確な対処法を見出すことができず周囲に圧倒された状態

この対処法は最も深刻なもので、自分なりの効果的な対処行動を見いだすことができません。周囲に圧倒され、なす術を無くしている状態になる場合です。強い「困惑」が生まれ、「茫然自失」となっていく。そこでは周囲の刺激が子どもたちにとって圧倒的な力を持つて侵入的あるいは侵襲的に映り、迫害的な不安に襲われていると想像できる状態です。そのため、彼らは自分でその場から逃げることも、誰かに助けを求めることもできなくなりません。まさに全身が凍り付いたような状態を呈するようになるのです。それは精神病理学的には「カタトニア」と称される病態と同質のものだと考えられます。

この種の行動は、先ほどまでの対処行動と同列に並べることはできないほどより深刻なものです。精神病的反応とはまさにこのような状態ではなかるうかと推測されます。

以上、二歳台になつて顕在化する多様な対処行動を見てきましたが、三歳台以降になると、それはより一層複雑になるともに、子ども自身が母親や第三者の前で「アンビヴァレンス」それ自体を容易には表に出さなくなります。その意味でも生後三年間を中心に母子関係の様相を観察した今回の結果は、これまで自閉症スペクトラム障害(ASD)の症状や障害と記述されてきたものの成り立ちを考える上で大きな示唆を私たちに与えてくれます。

アンビヴァレンスを捉えることによって治療は展開する

これまで暗い話が多かったのですが、明るい将来が見えて来るような話をして終わりたいと思います。(笑)

これまで述べてきた知見は私にとって非常に大きな力となつたことを日々実感しています。こころの動きを関係からみるということがどのようなことを生々しいかたちで教えてくれたからです。アンビヴァレンスというものが具体的にどのような親子関係の中で生まれるのか、目に見えるかたちで捉えることができるようになったことです。それは前半に説明した「母親が直接関わろうとすると子どもは回避的になるが、いざ母親がいなくなると心細い反応を示す。しかし、母親と再会する段に

*予約 2号分2000円 3号分3000円 4号分4000円

*1冊のみ注文は送料200円加算 2号分以上は送料なし

郵便振替 00160-4-184978 創樹陣営発行所

273-0105 鎌ヶ谷市鎌ヶ谷8-2-14-102 佐藤幹夫

e-mail:miki-kiga@kif.biglobe.ne.jp

佐藤幹夫ホームページ http://www5e.biglobe.ne.jp/~k-kiga/

35 2010・3(1000円+税)

[ロングインタビュー]橋爪大三郎のマルクス講義(第一回) [人間と発達を考える会] 西研、滝川一廣、小林隆児、内海新祐、愛甲修子、(シリーズ人間学アカデミー)佐伯啓思、池田清彦、菅野覚明、

34 2009・3(1000円+税)

[小特集]人間の発達と社会 西研、滝川一廣、内海新祐、栗田篤志

(シリーズ人間学アカデミー)佐伯啓思、池田清彦、菅野覚明、

32 2007・8(1200円+税)

[特集]三島由紀夫と吉本隆明(三島由紀夫を読む) 西尾幹二、橋爪大三郎、西脇慧、阿久津斎木 (吉本隆明を読む) 瀬尾育生、近藤洋太、添田馨、中山勉、根本義明 (人間学アカデミー) 荻谷剛彦

31 2006・7(1000円+税)

[特集]子ども問題は、大人問題である

(第1章)教育社会学から考える 荻谷剛彦、(第2章)精神医学と心理学から考える 滝川一廣、十一元三、藤岡淳子、(第3章)現場から考える 由紀草一、赤田圭亮、斉藤祐、内海新祐、(第4章)哲学から考える [討議]「自由は人間を幸福にするか」…佐伯啓思、竹田青嗣、長谷川三千子、(司会)小浜逸郎

30 2006・2(1000円+税)

[小特集]神なき時代の宗教—元信者たちの独白 郷田素人、佐渡翔(元阿含宗)、寺畑多聞(元オウム真理教)、西脇慧(元オウム真理教) [シリーズ・人間学アカデミー] 滝川一廣・浜田寿美男・長谷川三千子

29 2005・5(1000円+税)

[シリーズ・人間学アカデミー]人間はどこまで自由か 長谷川三千子・浜田寿美男・小浜逸郎・滝川一廣

[小特集]セクハラについて 佐藤通雅、阿久津斎木、赤田圭亮、中山順子、荻田日出美、

28 2004・11 [総特集]自由・社会的逸脱・精神医療 (1000円+税)

[第一章]自由と責任 長谷川三千子・浜田寿美男・小浜逸郎・滝川一廣 [第二章]社会的逸脱と精神医療 浜田寿美男・高岡健・林香司 [第三章]精神医学化する現代社会 熊木徹夫・内海新祐 [第四章]本を読む

27 2004・6 「知はそしてトリビアになった!？」 (1000円+税)

[I アメリカ・中国・日本]橋爪大三郎 vs 小浜逸郎・佐伯啓思・櫻田淳・村瀬学・宗近真一郎 [II シリーズ人間学のために]小浜逸郎・滝川一廣・副島洋明 [III 知はそしてトリビアになった!？」 呉智英インタビュー IV [シリーズ・戦後思想の諸相] 勢古浩爾・由紀草一・倉田比羽子・近藤洋太・添田馨

26 2004・1 [この国はどこに向かっているのか] (1000円+税)

[1-政治/戦争/テロリズム]橋爪大三郎/佐伯啓思/ [2-(性)] 岸田秀「ニッポンの(性)はどこへゆくのか」 [シリーズ・人間学のために(言語・身体・表象)] 小浜逸郎/滝川一廣/村瀬学

25 2003・7 [総特集] 吉本隆明という開放区 (増頁特別定価 1200円+税)

[ロングインタビュー]橋爪大三郎/竹田青嗣/瀬尾育生

[エッセイ・論考] 佐藤通雅/勢古浩爾/村瀬学/小浜逸郎/井崎正敏/浜田寿美男/滝川一廣他

*創刊号より23号まで、および33号品切れ。32号残部僅少。

なると再び回避的反応を示す」という関係のありようです。

アンビヴァレンスという心理をこのような関係の特徴として示すことができたことよって、私は日頃の面接において患者治療者関係においても同じことが繰り返し起こっていることを実感するようになりました。子どもと母親とのあいだで起こったこの動きとまったく同じくらいいいほど同じような動きが患者治療者関係において手に取るように感じることができるようになったのです。子どもの動きと患者の動きの類似に気づいたことです。具体的にのべてみましょう。

患者さんは困っているから相談にきます。そのため最初は自分から悩みを話そうとします。しばらく聞いていて、こちらからいろいろと訊ねていく中で、患者さんの気持ちに少しでも触れようとして語りかけると、途端に回避的反応を示して、「それでもない」「そんなに苦しくない」などと言ったりします。これは何を示しているかと言いますと、私が最初あまり患者さん側に近寄らず、中立的な態度を取っているのですが、患者さんの話を聞いていくにつれて、次第にその話に共感できるようなったので、私はその気持ちを示そうとして、つまりは心理的に患者さんに近づこうとして語りかけるのです。すると先ほどまでの態度と打って変わって患者さんは私からすっと離れていく感じを受けるのです。これは目には見えない心理的距離の変化です。しかし、それは当事者である治療者は自分のこのころの変化として実感を持って気づくことができるのです。さきほどまでお話ししてきた乳幼児期の母子関係では目に見えるかた

ちの物理的距離の変化でした。そうした違いがありますが、ここに関係の視点から見ることの重要性が示されています。

人間のこのころの発達には、最初母子関係の中で培われていきます。「甘えたくても甘えられない」「子どもの行動にアンビヴァレンスの心理を読み取ったのですが、このような関係の蓄積の中で子どものこのころにアンビヴァレンスという心理が内在化していくことになり得ます。よって、成長した後はその個人の心理的特徴として示されますが、その関わり体験が後の患者治療者関係の中に再現するということを示しています。よって治療者として患者に関わる際に、このような視点を持つことによって私たちは患者さんの幼少期のアンビヴァレンスの体験を現時点で把握することが可能になっていくのです。

このことはこれまで精神分析の世界で「転移」と称されていたものであることはおわかりでしょう。そのことがMIUの実践を通して目に見えるようになって来たのです。これで多少は皆様の気持ちにも明るい未来が見えて来たのではないかと願っています。ご清聴ありがとうございました。

(付記) 本講演では治療論についてはほとんど語ることはできませんでしたが、今年春、『あまのじやくと精神療法』(弘文堂)を発売する予定です。参照いただければ幸いです。